


評価される小論文が書けるコース



はじめに

ようこそ。この講座は小論文・実務論文の専門講座です。高評価をもらうためには、何を書いたらいいか、どう書いたらいいかを学習していきます。

昨今は、昇進昇格や配置転換、もちろん新卒採用もありますが、小論文が課されることが多くなりました。もっとも、作文とさして変わらない水準のものも多いのですが、それでもかつてのように「ちゃんと文を書いて伝えられる能力」としてのみならず、思考力や問題認識や分析や見識など、本来の「人間力」そのものを論文で測ろうとするようになりました。

ただの「文章上手」であればいい、という質のものではなくなっているのです。それだけ本当の能力が求められてもいるし、同時に、こういう試験の場などを通じて人材を育成しようというねらいもあります。

文は人なり。人は文なり。言葉と文に「地力」が具現していくものです。

それはその場しのぎで取り繕っても、優等生的に装飾しても、自然体を装ってみても、見る人には、その奥が見えてしまうものです。見えてしまうのであれば、堂々と見せればいい。そのくらいの気概で文章に挑み、見られても恥ずかしくない自分と、それを表現する力をつけていきましょう。

もちろん、こうすれば高評価の小論文がひょいひょいと書ける、なんて都合のいい話などありません。そんな魔法の杖があつたら、誰も苦勞しません。思索や表現の力量が、一朝一夕に獲得できるわけがないのです。それでも登るべき山は、そこにあります。だから確実な方法で、万全の装備で、一歩ずつ登っていくことです。

文章表現力というものは、ビジネスのさまざまな場面で必要とされます。でも、いまあなたがめざすのは、評価される小論文。まず、評価者が何を見ているのかを理解すべきです。それがわかれば、すすむべき方向は決まります。焦点が絞れます。そこに求められる文章表現力を磨くための道筋と要諦を学んでいくことにしましょう。

目次

はじめに	3
第Ⅰ部 小論文を書くための基本心得と文章技術	5
1. 小論文に適した文体と文章構築	6
2. 相手を意識したうえでの自己表現	12
3. 読み手に理解してもらえる論理と表現	16
4. 評価者の目につきやすい文章技術上の問題	19
5. 表現上手になるには読解力を鍛える	22
6. 論文の基本構造——要素と流れを理解する	25
7. 問題意識がなければ論文は書けない	29
8. 「筋が通っている」と思わせる根拠・論拠の示し方	32
9. 具体性と説得性が高まる事例の示し方	35
◆研究課題1	38
第Ⅱ部 高評価をねらうための実戦トレーニング	39
1. 文章表現力に内実がともなっているか	40
2. 現場に立脚した具体論を展開する	43
3. 問題点を抽出し、吟味し、深耕する	45
4. 評論で終わらせず「何をどうするか」と解決策を示す	47
5. 日々現実に向き合うなかで見えてくる問題は何か	50
6. 独創的な意見、アイデア、提言を盛り込む	52
7. アイデアを実現していくための方策を示す	55
8. 議論を促すくらいの踏み込んだ提言を	58
9. 実務への誠実な取り組み姿勢が文面に表れる	61
10. 小論文の事前準備はどこまで可能か	63
11. 2,000字の小論文——文例と評定のポイント	65
◆研究課題2	79

第 I 部

小論文を書くための 基本心得と文章技術

1

小論文に適した文体と文章構築

形よりも中身、そして形へ

形
「正解」の論文

中身

文体 展開

「マニュアル依存」と「正解希求」の学習を生きてきた人は、どうしても形にこだわります。テーマに対して「正解」の論文をみんなが書いているとしたら、そんなおかしいことはありません。そのうえで字がきれいとか誤字がないとか…,そういうことはむろん基本ではありますが、実務論文で見るべきポイントではありません。何といても中身。何をとらえ、何をどう考え、どういう見解を述べるか。ここに集約されます。

だから、形は中身によってつくられていきます。文体も展開も、本当はそうなのです。鋳型と段取りに当てはめていけば何とかなる、という体裁のものではありません。これが本義、本質です。

これから文章の「表現技術」を説明しようというのに、あえてこのようなことを述べたのは、小論文の勝負どころは「中身」だということを心にとめてほしかったからです。

「まとめる」より「展開していく」

まとまっている

展開していく

考えていく過程

よく勘違いする人がいます。「まとまっている」という言葉。まとめる、まとまらなくなった、などと使います。誰が言い出したんでしょうね。まとめようとする、どうしても平凡になるものです。それよりも「展開していく」という言葉を旨としてください。まとめなくていいというわけではありません。「考えていく過程」を語ってほしいということです。まとめることばかり意識していくと、結論だけを書くようになってしまいます。

「わかりやすく」とはレベルを下げることではない

わかりやすさ

もうひとつ勘違いされやすいのが「わかりやすさ」。わかりやすく書けというのは、子ども向けに書けということではありません。述べてい

る**中身のレベル**を落とす必要はありません。子どもには決してわからない高度な内容を、読み手にスッキリと伝えることです。内容は、いつもレベルアップさせようとしていくべきです。

中身のレベル

単に情報を伝える文と、考えを述べていく文、そして説得していく文、これらを厳密に使い分けられるようになりたいものです。文章表現に多様なレパートリーを持つということ。どれでもできるし、さてこの場合はどれでいくかなと、選択して書き分けていけばいいのです。いっしょくたにしていくと、妙にレベルが下がってしまうので注意してください。

いま述べたことは一般論の最たるものですが、ひょっとしたら「まとまっている」とか「わかりやすく」とかいうことにとらわれているのではありませんか。是正しましょう。**表現**とは、もっと幅のある広大無辺の世界です。

表現

「だ、である」調を心がける

論文は、**常体**つまり「だ、である」調で書くのがいいと思います。もちろん「です、ます」調という指定があれば従いますが、本来、敬体は適しません。どうしても文調が軽くなり、自然と緩慢になりがちです。達意であれば、そんなものはどうでもいいのですが、これから学ぶということであれば、常体の文体を基調としていくことです。**断定的**である分、曖昧模糊を自然に排していく感触があります。それは論文の主眼の一つ「論理的である」ことに結びつきます。

常体
「だ、である」調
「です、ます」調

断定的

また、断定的というだけでなく、常体には、**規定的、決めつけ的、主張的**という傾向があり、自分の考えをはっきりと述べるべき論文のトレーニングには向いていますし、慣れておくのが得策です。

規定的
決めつけ的
主張的

自分の文体が形成されるとき

文体によって、知らず知らずに、書いている本人の思考法や展開が影響されるものです。人は文を書くけれど、文体は人もつくります。鋳型を逆に自己の啓発に活用するということになります。

さらに、もう一歩すすめます。学習していくうちに、書いていくうちに、**自分なりの文体**がつくられていきます。これは不思議なもので、自

自分なりの文体